

千野隆司

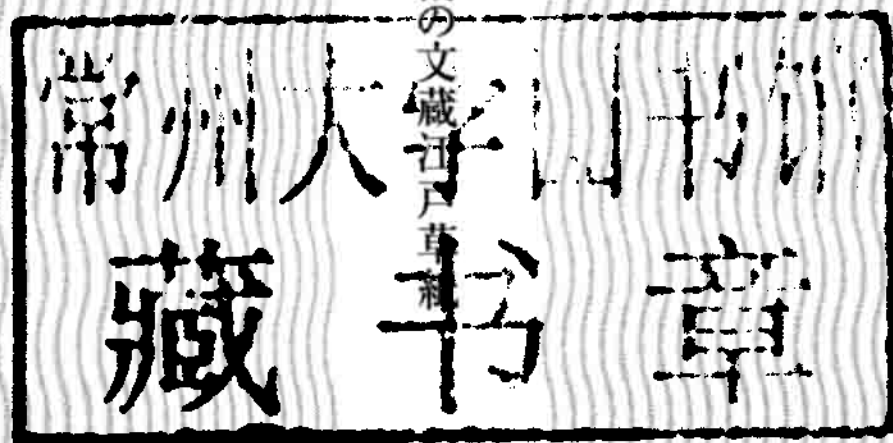
命の女

槍の文蔵
江戸草紙



命の女

槍の文蔵江戸草紙



千野隆司



学研M文庫

いのち おんな やり ぶん せう え ど せう し
命の女 槍の文蔵江戸草紙

ち の たかし
千野 隆司



学研M文庫

2011年5月24日 初版発行

●
発行人——土屋俊介

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Takashi Chino 2011 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・それ以外のこの本に関するお問い合わせは下記まで。

文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター「命の女」係

Tel 03-6431-1002(学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複写権センター TEL 03-3401-2382

Ⓔく日本複写権センター委託出版物

目次

鶴渡る

5

命の女

98

雪の行列

184

命の女

槍の文蔵江戸草紙

千野 隆司



学研M文庫

目次

鶴渡る

5

命の女

98

雪の行列

184

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

鶴渡る

一

暮れかけた朱色しゅいろの日差しが、枯れ枝を照らしている。初冬の風が、残っていた数枚の茶色い葉を舞い散らせた。

白い鳥が三羽、空の高いところを飛んでゆく。この鳥の体も朱色を帯おびて、薄闇の空の彼方へ飛んでいこうとしていた。「クルルークルル、コツコツ」と響き渡る強い声が、あたりに降ってきた。

「おや、鶴もみじやせんじゃないか。もう渡ってきたのか」

紅葉屋仙つぶや之助はそう呟つぶやいて、空を仰あおぎ見た。鶴の本隊が北から渡ってくるのはもう少し後だが、様子見をするように十月になるかならないうちに飛んでく

る数羽がある。

去年も一昨年も、そして何年か前もそういう鶴を見上げたことがあった。飛んできた鶴は、春になって北の空へ去って行く。

「律儀りちぎなものだね。ああやって毎年。よつぽど人間よりしつかりしているじゃないか」

吹き抜ける風にやや背を丸めて、仙之助はもう江戸とも言えない大塚仲町の裏通りに入った。

古材木だけを集めて建てた、傾きかけた長屋が二棟並んでいる。炊飯のにおいと、子どもを叱しかる甲かん高い母親だんなの声が聞こえた。

「ああ、紅葉屋の旦那」

奥にある建物の、真ん中の部屋の前で、三十年配の男が天秤棒てんびんぼうを降ろしたところだった。両方のザルの底に、蜆しじみが少し残っていた。

「売り切りもしないのに、戻ってきたのか。ずいぶん、おおような商あきないをして
いるねえ、あんたは」

「いや、女房と餓鬼がきが熱を出して寝込みやしてね、それで早めのしまいにして
戻ってきたんですよ」

仙之助の見下すような物言いに、男は少しむっとした顔をした。しかし強く出ることはできない。

「それで昨日返すはずの金を、返しに来られなかったのかい。いい年をして、甘ったれた話だねえ。今日だって黙っていりゃあ、知らんぷりをするつもりだったんだろう」

「そ、そんなつもりじゃ」

「ならば見せてごらん」

「ああっ」

仙之助はかまわず、男の腹掛けのどんぶりに手を出した。蜆の売り上げが入って膨ふくらんでいた。

「しけているねえ。これっぽちか。まあ、これだけもらっておこう」

すべて鑢びた銭せんである。素早く数えて、百五文を自分の巾着きんちやくに落とし込んだ。残りは数枚しかなかった。

「これじゃあ、寝込んでいる女房や子どもに薬どころか、飯も食わせられねえ」

男は今にも泣きそうな声を出した。

「ふん。その手には乗らないよ。銭を出すのが嫌だったら、女房と子どもが寝ている布団を貰もらっていいんじゃないか。どっちがいいんだね。あんな薄っぺらい布団じゃ、いくらにもならないだろうがね」

仙之助の剣幕に、男は応えられない。

「いいかい。質草もなけりやあ、後ろ盾だてになる人もいないあんたに、誰が百文もの銭を貸すと思っているんだね。朝この金を借りたあんたは蜷を仕入れ、売って夕方には百一文を返す。それで女房子どもを養っていけるんだ。いったい誰のお陰だと思っているんだ」

言い捨てると、くると振り返って歩き始めた。まだ貸し金の取立てに行かなくてはならない場所がある。

いつまでもここで手間取っているわけにはいかなかった。

仙之助が男に貸した金は、からす金と称する高利のものである。明けがらすのカアで貸し、暮れのカアまでに、百文を百一文にして返させる。年利にしたならば、元金が三倍半になるという恐るべき高利である。しかし無証文無担保で、顔見知りだというだけで貸す金だった。

貸さないと言ってしまったら、その日から稼ぎの元手がなくなることになる。

だから仙之助がからす金で貸す相手は、青物や浅蜷^{あさり}、蜆、齒磨^{はみが}き粉や付け木といった棒手振^{ぼてふり}や日雇^{ひやと}い稼^とぎといった者たちがほとんどだった。細かい銭の貸し借りだった^が、まとめると馬鹿にならない儲け^{もう}になった。

またこれだけではなく、日済^{ひなし}貸^かしというものも、裏通りの小店の主人を相手にやっていた。

これは一両を利息二朱の先取りで貸し、毎日百文ずつ二ヶ月で返させた。一朱は十六枚で一両である。実質年利は八割五分を越す。これは証文こそ取り交わすが、担保はない。やはり借りやすいというのが特徴だった。

仙之助は午後になって日が傾き始めると、この貸し金の取立てに歩き回った。大塚仲町を出ると、あたりはすっかり暗くなっていた。取り立てた銭は、小ぶりな合切袋^{がっさい}に入れて腕^{うで}で抱えている。

かねて用意してある提灯^{ちようちん}に明かりをつけた。

この数日、風がめつきり冷たくなっている。

「まったく、どいつもこいつも世話を焼かせる奴らばかりだ」

ぶつぶつ言っている。こんな薄ら寒い中、日暮れた後も歩かなくてはならないのは、貸し金をきちんと返しに来ないからである。人から大事な銭を借りな

がら、なんという不屈きな奴らなのだと考えるのだ。

仙之助は今年五十一歳になる。金貸しは本業ではなく、裏稼業だった。やめたいという気持ちもなくはなかったが、実入りが減るのには、歳をとって心細さがあつた。

本業は小石川護国寺門前の音羽町九丁目にある、九左衛門店きゆうざえもんという裏長屋の大家をしていた。三つ年下の女房お染そめと長屋の近くのしもた屋に住んでいる。子どもはなかった。

五年前までいたのだが、博奕ぼくちにはまって大きな借金を作ってしまったのである。

借金は返したが、一人息子はそれきり勘当した。どこをふらついているのか、消息を聞くこともないままに歳月が過ぎていた。

「いなかったことにしようよ」

お染はよくそう言っている。

「ヒックション」

クシヤミが出た。片側は武家地で、もう一方は田の道である。はるか先に、護国寺門前の町明かりが見える。周囲に人気はまったくなかった。

仙之助は腹にある巾着きんちやくの重みに片手を当てながら、道を急いだ。もう一軒、音羽町内に寄らなくてはならない家がある。

武家屋敷の壁が終わった。護国寺山門はだいぶ近づいたが、しばらく空き地が続く。

明るいうちは、参拝客で賑わう山門あたりだが、すでに露店はすっかり引き払っていて、閑散としている。

「な、なんだ」

いきなり黒い影が目の前に立った。羽織袴はかまをつけた侍だった。粗末なものでなく、月代さかやきも剃そっていた。ご直参じきさんかどこかの藩の勤番侍とおぼしい身なりだった。

提灯は手にしていない。仙之助の持つ提灯が、侍を照らしている。四角張った顔で、両の頬ほおに痘痕あばたがあった。浮腫むくんだ細い目が、こちらを見詰めていた。

何も言わず、腰の刀に左手を添えた。鯉口こいぐちを切っている。

「ひっ」

辻斬りだと気がついて、足が震えた。どこかに誰かいないかと後ろを見ると、

人がいた。二十代半ばの遊び人ふうの男が立っている。狐のように顎あごの細い男で、唇に嗤わらいが浮かんでいた。

二人はぐるだと、すぐに察した。後ろの男は、逃げ道を塞ふさいでいるのだ。

「い、命ばかりは、お助けを」

後ずさりしながら、仙之助は言った。喉がからからになっている。

侍は無言のまま、刀を抜いた。顔には怒りも憎しみも浮かんでいない。

不気味だった。

腕に抱いているのは、今日集めてきた金の入った合切袋である。しめて六兩二分入っている。ここで奪われるのはいかにも無念だが、命には代えられなかった。

「こ、これを」

仙之助は、震える手で重くなった合切袋を差し出した。すると背後にいた遊び人ふうが回り込んで取り上げた。

そしてすっと体を離した。

侍が抜き身の刀を振り上げた。

仙之助が持っている提灯ががたと震えた。斬られると察したのである。

「ぎゃっ」

提灯を振り捨てて横へ逃げた。だが侍も目の前に躍り^{おど}かかってきていた。肩に焼き鑊^{ごそ}をつけられたような痛みを感じて、仙之助は尻餅をついた。

濃い血のにおいはしたが、意識はしっかりしている。侍はゆつくりと、刀の切っ先をこちらへ向けなおした。止め^{とど}を刺そうということらしかった。

声を出そうとしたが出ない。体が震えるばかりである。

侍の腕が動きかかった、そのときである。

「だれかつ。人殺しだよ」

女の叫び声が、あたりに響いた。思いがけず近くからだった。

「てえへんだ。てえへんだっ」

男の声まで聞こえた。ばらばらと足音が、近づいて来る。

侍の体が一瞬固まった。そしてすぐに、体の向きを変えた。止めを刺すのを断念したらしい。遊び人ふうの男と二人、闇の道に駆け込んだ。

迷いのない動きだった。